

<発達支援講演会を開催しました>

令和3年7月27日（火）に、町内在住の方、教育・保育・療育にかかわる方を対象としてZoomによる発達支援講演会を開催いたしました。今回は、齊藤真善先生（北海道教育大学札幌校准教授）より「ディスレクシアの子どもたちが困っていること～流暢性を高める支援について～」というテーマで、読みに困難を抱える子どもたちがどこに困り感を持っているのかをはじめ、事例を基にした具体的な支援方法について講演していただきました。その講演の内容をいくつか紹介します。

○困り感の根底にあるもの

読むことの困り感の根底にあるのは、言葉に含まれる拍を感じたり拍に乗って話したりすることが難しいという「音の分割（音韻的意識化）」の困難さと、目で文字を追って思い起こし言葉に組み立てることが難しいといった「音の統合（読みの流暢性）」の困難さである。日本語（ひらがな）は、文字と音の対応関係が英語と比べてわかりやすいが、逐次読み（文字を一文字ずつ読むこと）の段階が続きやすく、文を読んで意味を理解するといった読みの流暢性に困難さが残りやすい。文字を切らず一定の速度でスムーズに読むためには、子どもに合った読みの速度を見つける手助けが必要である。

○読み間違いが起こりやすい状況

読むときには、脳内に保存されている単語の全体的なパターンや以前聞いた音から引き出して発音する「語彙経路」と、初めて見る文字列の一字ずつを思い起こし組み立てて発音する「非語彙経路」の2つを使用しており、語彙経路の方が読み速度も速く自動的といえる。多くの子どもは初めて見る文字列でも数回読めば流暢に読むことができるが、読み障害の子どもたちにとっては難しい。そういった子どもたちは、学年が上がるほど読む速度を周囲と比較し速く読もうとすることが多く、単語の雰囲気を読もうとして慣れ親しんだ文字の列に読み違えてしまうことがある。見て捉えることに課題があるように思われるが、そう見えているのではなく本人の処理できる速さを越えた要求を本人や周囲がしてしまっている可能性を考え、ゆっくり読むよう伝えることが必要である。また、読書量と語彙数には関連があり、読み障害は語彙を獲得することの困難さにも影響する。

○読みやすいリズム・間隔を知る

流暢に読むためには、リズムや眼球運動が関連している。読みやすいように意味のまとまりで文を区切ることが多いが、そうすると変拍子になってしまったり文の間隔が異なったりするために眼球の動きと発音が合いにくくなる。流暢性を高めるならば、個々に合った拍子、音の単位、刺激の量、眼球運動の距離などを見極めて支援していくことが望まれる。俳句など、日本語は特に2音のまとまりをベースにしていることが多いため、2音ずつに分けることで読みやすさに繋がる。

○「わかること」を楽しむ学習の場を

読み書きには大変複雑な認知的プロセスが必要であり、読み書きの習熟を待っても学習は上達されない。学校での学習は、タブレットを有効活用したり板書は写真で撮る、目で見ても読むことが難しいのであれば耳から聞いて考えることができるように対応するなど、読み書きに困難さを抱えていても「わかること」を楽しむということに視点をおくことが望まれる。